



**結 婚**

**和乃 璃瑚**

ここ数日の雨に力尽きた花びらが、次から次へと風に舞う。仲良く手をつないで歩いてきたカップルは、桜を見上げてはしゃいでいる。

「きれ〜い！」

「桜って咲いてる時もいいけど、散る時の感じもたまらないよな」

「なんだかフラワーシャワーみたいじゃない？」

「よし、俺たちの式でもフラワーシャワーやるか」

「うん！」

どうやら結婚を間近に控えたカップルのようだ。

水森隼人は、まだはしゃいでいるカップルを横目で見ながら足早に通り過ぎた。

――あの日もこんな風に桜が舞っていたな。あんなことがなければ、寺本と穂波ちゃんもあのカップルのように、幸せそのものという顔でこの桜を眺めていたんだろうか。

あれから一年が過ぎた。水森の周囲はようやく落ち着きを取り戻していたが、桜を楽しむことは、この先何年たってもできないような気がした。それ程にあの事件は重苦しく、やりきれないものだったのだ。

昨夜から降り続けていた雨は、今朝になっても一向にやむ気配すらない。窓に打ち付ける雨の音で目を覚ました男は、ベッドの中で軽く舌打ちをした。本当なら、あと1時間は寝ていられるはずだったのだ。

——たまの休日にゆっくり寝ようと思ったらこれだよ。

もう1度寝ようと試みたものの、じっと目を閉じていても眠れそうにない。男は諦めてベッドから抜け出した。

この男、寺本努は証券会社に勤める32歳。普通の高校を出て普通の大学に入り、運よく証券マンになったものの、結局は普通のサラリーマン生活を送っていた。毎日同じ時間に起きて、同じ電車で揺られ、仕事に疲れて帰ってきたら、風呂に入ってビールを飲んで寝る。数日に1度、付き合っている彼女との電話をする程度だ。

しかし、そんな努が大きな転機を迎えようとしていた。それは彼女との結婚だった。

彼女と出会ったのは2年前の夏。太陽がさんさんと降り注ぐ日曜日に立ち寄った花屋だった。

盲腸で入院した友人を見舞うため、努は汗を流しながら病院に向かっていた。気心の知れた悪友だから、見舞いの品など持っていくつもりはなかったのだが、たまたま通り道に花屋があったことと、げんなりする太陽から少しの間だけでも逃れたいという思いから立ち寄った店だった。

「いらっしやいませ」

明るい声がして、店の奥から店員が顔を出した。それが今の彼女、平石穂波だった。

髪をひとつに束ね、動きやすいジーンズ姿であるにもかかわらず、彼女はとても清楚に見えた。

——こんなにも花が似合う人はそうそういないだろうな。

「どんなお花をお探しですか？」

思わず見とれていた努はその声にハッと我に返り、友人の見舞いに行くと言った。

「それなら元気になるような花束にしましょうね」

彼女はそう言って手早く花束を作り始めた。努は聞かれもしないのに、早口でしゃべり始めた。

「そいつは昔からの悪友でしてね。花なんて持っていくような仲じゃないんだけど、あんまり綺麗だったから」

努はついでたらめを言ってしまうと、笑顔で頷いた彼女に背中を押されるように、努はしゃべり続けた。

「うさんくさい探偵をやってる奴なんです。普段は『俺は誰の助けもいらねえ』みたいなことを言ってるくせに、入院した途端、情けない声で電話してきたんです。だからしょうがなく見舞いに来たってわけで」

「どこがお悪いんですか？」

彼女は手を休めずに聞き返してきた。

「いや、ただの盲腸ですよ」

「そうなんですか。でも人間って、病気をすると心細くなりますもんね」

「でもきっと、俺の顔を見たら『暇だったから呼んだだけだ』とかなんとか言うに決まってるんですよ」

努が肩をすくめながら言うと、彼女は楽しそうに笑った。笑顔が最高にかわかった。

「お客さんとそのお友達は、ほんとに仲がいいんですね。お2人のやりとりを見てみたいですよ」

彼女の言葉を聞いて、努は反射的に言ってしまった。

「一緒に行きませんか？」

「えっ？」

戸惑っている彼女を見て、努は自分の言ったことにようやく気づき、慌てて弁明した。

「いや、冗談ですよ。そんな、ねえ？ 失礼なこと。気にしないでください。気がついたら言ってしまっただけで……。いや、だからっていつもこんなことを言ったりするわけじゃないんですよ」

作り笑いを浮かべて必死でごまかそうとするのだが、しゃべればしゃべるほど訳が分からなくなってくる。努は額から流れる冷や汗をふきながら、出来上がった花束を指して聞いた。

「い、いくらですか？」

「あ、えっと3000円です。」

「じゃ、これで」

努は財布から3000円を出して彼女に渡し、店を飛び出した。

——なんであんなこと言ってしまったんだ。絶対軽い奴だと思われたよな。

努がものすごい後悔の念に支配されながら歩いていると、後ろから声が掛かった。

「お客さん！」

振り向くと、走ってくるのは彼女だった。よく見ると花束を抱えている。努は自分が花束を持たずに店を出てきたことに気づき、顔から火が出るくらい赤面した。

「これ……、忘れ物……です」

息を切らしている彼女に顔を見られたくなくて、

「あ、どうもすみません」

と下を向いたまま早口で言って、くるりと背を向けて走り出した。努がさっきよりも激しく後悔していたのは言うまでもない。

病室でのんびりテレビを見ていた水森隼人は、息を切らして病室に飛び込んできた努を見て目を丸くした。

「なんだよ、お前、そんなに急いで俺に会いに来たのか？」

隼人が茶化して言うと、努もさらっと応酬した。

「お前があんまり情けない声で電話してくるからさ」

「ばか言え。俺はあんまり暇だからお前を呼んだだけだよ」

予想通りの反応に、努は笑ってしまった。

「なんだよ」

「いや、さっきこの花束買った店でさ……」

話したした努は、思い出して耳まで赤くなり、慌てて首を振った。

「何でもないよ。それより花瓶とかないのかよ」

努は平静を装ったつもりだったが、隼人は肩を揺らして笑っている。

「お前ってほんと、ごまかすのが下手だよな。柄にもなく花なんて持ってさ。どうせ花屋の店員に一目惚れでもして、つい買っちゃったんだろう」

――まったく、こいつはなんでこう勘が鋭いんだよ。昔からそうだよな。

それでも努はせめてもの反撃とばかりに

「残念でした。花屋に入ったのは偶然です」

と言ってやったのだが、すぐさま言い返された。

「あーそれで店員に惚れたわけね。似たようなもんだよ」

努は悔しかったが、当たっているからしょうがない。結局努は、ことの顛末を隼人に話すことになった。

話を聞き終えた隼人は、ニヤニヤしながら言った。

「ふーん。せっかく誘ったんだから、もっと押してみたらよかったのに」

「そんなことできるわけないだろ？ お前と一緒にしないでくれよ」

「おいおい、随分な言い方だな」

努と隼人は学生時代からいつもこんな調子だった。まっすぐで正直な努と、どこか世間をなめたような隼人は、正反対なのにとっても気が合った。いや、正反対だからこそ、磁石のように引き合ったのかもしれない。お互い言いたいことを言い合えて、1番心を許せる親友だった。

「で？ どうすんだよ」

隼人が聞くと、努は肩をすくめて言った。

「どうするって、どうしようもないよ。もう会うこともないんだしさ」

「そうかな？」

「そうだよ。どこで会うって言うんだよ」

「だってここから駅まで行くには、絶対その花屋の前を通るだろ」

隼人に言われて努はハッとした。もちろん店の前を通ったからと言って、必ず会うというわけではない。しかし偶然に彼女が店の前に出ていることもないとは言えない。頭を抱えた努に、隼人はおもしろそうに言う。

「どうする？ 店が閉まる時間まで、ここで時間つぶすか？」

隼人からかわれて、努は意地で言い返した。

「何言ってんだよ。店の前を通ったからって会うとは限らないだし。それにそんな何時間もお前といられるかよ」

「無理すんなよ」

「無理なもんか。じゃあな」

努は勢いよく言って、病室を出た。

「頑張れよ！」

背中の方から、相変わらず笑いを含んだ隼人の声が聞こえてきた。

――まったく。誰が無理なんかしてんだよ。別にどうってことないさ。

努はほとんど走るようにして、廊下をどンドン歩いていったが、病院を出たところで急に立ち止まった。前から来た人が怪訝な顔で努を見たが、努はそれどころではなかった。

――本当に会っちゃったら気まずいなあ。でもあの店の前を通らないってわけにもいかないし……。やっぱり病室に戻るか？ いやいや、そんなことをしたら水森に何を言われるか分かったもんじゃない。あいつはまた喜んで俺をからかうだけだ。

「行くしかないか」

努は決心して歩き出した。

花屋が近づくにつれ、努の足取りは速くなった。なんとか無事に通り過ぎさせてくれと祈りながら店先までやってきたとき、

「お先に失礼します」

という声がして、彼女が店から出てきた。

すぐ近くで顔を合わし、彼女が自分に気付いたと分かった努は、「どうも」と軽く頭を下げてその場を通り過ぎようとした。

――なんで俺はこんなに運が悪いんだ。もう少し時間がずれていれば……。

すると後ろから彼女の声がした。

「どうでした？」

彼女は明らかに努に話しかけているようだった。努は思い切って振り返って聞いた。

「何がですか？」

すると彼女はいたずらっぽく笑いながら言った。

「お友達、『暇だったから呼んだだけだ』って言ってました？」

努は驚いた。くだらない雑談で努が言ったことを覚えていたことも、そのことで努に声を掛けたことも驚きだった。

しかし本当の驚きはその後だった。

「私、今日はこれで上がりなんです。よかったら……、もしよかったらいいんですけど、お友達との話、聞かせてもらえませんか？」

努は思いっきり、ほっぺをつねった。

努は手早く朝食を作りながら思い出していた。

——あの時、穂波が声をかけてくれなかったらどうなってただろう。花屋に寄らなかったら、もっと言えば隼人が入院してなかったら……。

隼人に穂波とのことを話した時、隼人は「俺があの時お前をけしかけなかったら、花屋の前でばったりなんてことなかったんだろ。てことは、俺はお前らのキューピットってわけだ」と偉そうに言っていた。

「キューピットか。あいつに1番に会わない言葉だよな」

努はつぶやいて苦笑いした。

何はともあれ、穂波とはそれがきっかけで付き合うようになり、来年の6月にはいよいよ結婚することになった。

今日も式場の見学の約束をしている。男にとってはどこでも同じような気がするのだが、女にとっては色々こだわりがあるようで、穂波も例外ではなかった。正直疲れることもあるのだが、一生に1回のことだし、穂波の好きなようにさせてやろうと思っていた。

穂波とランチをしてから式場を見学し、あれこれと質問し、ドレスの試着までしてようやく終わった頃には、もう夕方になっていた。その足でエンゲージリングの注文に行き、隼人と会うことになっている店に行くと、隼人はもう来ていた。

「なんだよ水森、珍しく早いな」

「こんばんは。ごめんなさい、お待たせしちゃったみたいで」

「いいの、いいの。俺はどうせ暇なんでね」

隼人は冗談っぽく言うと、店員を呼んだ。

穂波がトイレに立つと、束の間の男同士の会話が始まる。

「穂波ちゃん、幸せそうだな」

「そうか？」

「ああ。笑顔が違うよ。もともといい笑顔の子ではあったけど、今は輝いてるよ。『私いま、幸せです♡』みたいな」

隼人が女口調を真似て言うので、努は吹き出した。

「でも大変だぞ。式場決めるのだけでこんなに大変だなんて、先が思い遣られるよ」

努がため息をつきながら言うと、隼人は笑いながら言った。

「そりゃそうさ。幸せな奴にはそれと同じくらい大変な思いをしてもらわないとな」

「そうだな、なんてったって俺は幸せなんだからな」

「あ、何だよそれ。あてつけか？」

努と隼人は声を上げて笑った。

確かにこの時が努にとって1番幸せだったのかもしれない。



電車がホームに滑り込むと、開いたドアから次々と乗客たちが吐き出されていく。ただでさえも月曜日は気が滅入るのに、今にも降りだしそうな空のせいで、急ぎ足で歩く人達の顔は暗かった。努も例外ではなく、それどころか、2日酔いも加わって最悪の気分だった。

――やっぱり飲みすぎたな。あいつと飲みに行くといつもこうなんだよな。

昨夜、穂波と隼人と3人で食事をし、2軒目に行ったところまではよかった。問題は、穂波を家まで送り届けた後だった。当然のように、男同士でもう1軒、という話になった。穂波はそうなることを見透かしたように、

「あんまり飲み過ぎちゃだめよ。ま、言っても無駄だろうけどね」

と笑って言った。

昔からの馴染みの店に行くと、マスターは口の周りのヒゲをもさもさ動かしながら言った。

「よう、2人揃って来るなんて久しぶりだな」

「こいつがのろけ話を聞いてほしいって言うからさ」

隼人が努を指して言うので、努も負けじと言い返した。

「何言ってるんだよ。帰ってもひとりじゃ寂しいだろうと思って付き合ってるや」

「ははは。相変わらずだな。ま、突っ立ってないでとりあえず座れよ」

マスターに勧められて、2人はカウンター席に座った。

「で？ ドリンクの好みも相変わらずか？」

マスターはそう聞きながら、返事も待たずに2人のドリンクを作り始めた。

結局2人は閉店まで飲み続け、しゃべり続けた。2人とも同じくらい飲んだはずなのに、隼人はほとんど酔っていなかった。それに引き替え努は、立っているのがやっとという状態だった。

「酒の強さも相変わらずだな」

マスターに冷やかされても、言い返す元気もない。店の前でタクシーに乗り込み、隼人に家まで送ってもらうのもいつも通りのことだった。他の人の前ならばこんな風にはならない努が、隼人の前ではそこまでさらけ出すことができるというのは、2人の関係をよく表していた。

ベッドに倒れこむなり、努は深い眠りに落ちた。

「やれやれ、まったく世話の焼ける奴だぜ」

隼人が苦笑いしながら呟いて部屋を出て行ったのにも、当然気が付かなかった。

翌朝、目覚まし時計の音に叩き起こされた努は、ベッドの中で2転3転してから起き上がった。この目覚ましも、昨夜隼人がセットして帰ったものだ。しかもシャワーを浴びる時間まで考慮してある。

「いつものことながら、どうもすいません」

居もしない隼人に向かって、努は頭を下げた。

いつだったか、穂波に聞かれたことがある。

「あれだけタフで男らしくて、それでいてマメなところもある水森さんなら、女性は放っておかないんじゃない？　なのにどうして恋人がいないのかしら」

「確かにいくらでも寄って来てるみたいだな。でもどれも長続きしないんだよな」

「どうして？　まさか……」

穂波は言いにくそうに一旦言葉を切り、真剣な顔で聞いた。

「女の人より男の人が好きなの？」

努は一瞬目を丸くし、大爆笑した。涙を流して笑っている努を見て、穂波は口をとがらせて言った。

「何よ、そんなに笑わなくてもいいじゃない」

「だってさ、想像するとか」

努はしばらく笑い続け、ようやく涙を拭いた。

「あいつは正真正銘女が好きだよ。たださ、去る者は追わずって主義だからな」

「だから、どうしてどんどん去っていくの？」

「何がどうってことじゃなく、たぶんついていけないんだろうな。ほら、あいつって、つかみどころがないって言うかさ」

「あー、確かに」

穂波は苦笑いしながら言った。

「それが魅力でもあるんだけど、彼女となると辛いかもね」

「だろ？　それでもついて来てくれる人はなかなかいないだろうな」

ホームの人ごみに揉まれながら、痛む頭を押さえて歩いていると、ホームの端で隣の線路を覗き込んでいる女がいた。努は興味がわいて近づいてみた。

――少しはこの最悪な気分も晴れるかもしれないしな。

その間も女は線路を覗いては顔を上げ、オロオロと周りを見回している。

「どうかしたんですか？」

努が近寄って聞くと、女はホッとしたように言った。

「あの……傘を落としてしまって」

小さな声で答える様子は少し陰気に思えたが、どこか嬉しそうにも見えた。恥ずかしいのと安心したのとで、そうになっているのだろうと努は解釈した。

「早く拾わないと、電車が来たら困りますよね」

努は周囲を見回したが、駅員は近くにいない。

――しょうがない。降りて拾うか。

「じゃ、ちょっと降りて取りますよ」

荷物を置いて上着を脱ぎながら努が言うと、女は慌てて首を振った。

「あ、危ないですよ、そんなこと」

「大丈夫ですよ。傘を拾うくらい、すぐですから」

努はひょいと線路に飛び降りて傘を拾い上げ、女に渡してからホームをよじ登った。思ったよりも高くて少し苦勞したが、なんとかホームに戻ると女から上着を受け取った。

「ありがとうございました。あの……」

女が口を開いた途端、大きな声が飛んできた。

「お客さん！」

見ると駅員が走り寄ってくる。

「困りますよ、お客さん。線路に物を落としたら駅員に連絡するようについて書いてあるじゃないですか」

「どうもすみません。駅員さんが見当たらなかったもので」

努は頭を掻きながら謝った。

「それにしたって線路になんか降りて、何かあったらどうするんですか」

なおも説教が続く様子に、女が口を挟んだ。

「あ、あの、私が傘を落としてしまって……。私がすぐに駅員さんを呼べばよかったんです。私が悪いんです。この方は助けてくれただけなんです」

女が必死になって言うと、駅員は軽くため息をついて言った。

「ま、今後は気をつけてくださいよ」

駅員が行ってしまうと、女は努に向かって頭を下げた。

「すみません。私のせいで……」

「いや、いいですよ。じゃ」

照れ笑いを浮かべながら努が立ち去ろうとすると、女が呼び止めた。

「あの、私、島田華澄と言います。お名前教えていただけませんか？ お礼がしたいので」

「そんな大したことじゃないですから」

そのまま立ち去った努は、さっきまでとは打って変わっていい気分になっていた。朝から人助けをしたことで、2日酔いが消えてしまったかのように爽やかな気分だった。

――今日は一日いい気分です仕事できそうだな。

足取りも軽く歩いていく努には、島田華澄と名乗った女が努の後姿を見つめ続けていることに気付く由もなかった。

「おい、寺本。飲みに行かないか？」

努が帰ろうとしていると、同僚が声を掛けてきた。

「マジかよ。今日は月曜だぜ」

「そ、月曜からパーッと元気にさ」

「勘弁してくれよ。ゆうべも飲みすぎて大変だったんだよ」

同僚と話しながら会社を出ると、ひとりの女が立っていた。そのまま通り過ぎた努は「あれ？」と呟いて立ち止まった。

「どうしたんだ？」

「いや、今の女、もしかして……」

努が振り向くと、女は努に向かって頭を下げた。

「やっぱりそうか」

不思議そうに同僚が聞いた。

「知り合いか？」

「知り合いてわけじゃないんだ。今朝ちょっと……」

努が説明しかけたところに、女が近寄ってきた。

「今朝は本当にありがとうございました」

女は努に言ってから、同僚に向かって説明した。

「線路に傘を落として困ってたところを、助けて頂いたんです」

努は怪訝そうに女に聞いた。

「あの、島……」

「島田華澄です」

「ああ、島田さん。どうして僕がこの会社に勤めてるって分かったんですか？」

「鞆と一緒に持っていた封筒に社名が書いてありましたから」

「……」

「きちんとお礼が言いたくて」

「いや、ほんとに大したことじゃないんで」

努は「じゃ」と短く言って、同僚を促して歩き出した。礼を言うためにわざわざ会社を探り出して待ち伏せしていた華澄に、うすら寒いものを覚えたのだ。

同僚は曲がり角でこっそり振り返り、「うひょ～」を声を上げた。

「あの女、まだこっちを見てたぜ。お前に惚れちゃったんじゃないの？」

冷やかす同僚を無視して、努は歩き続けた。

島田華澄が会社までやってきてから、3週間ほどがたった。

あの日は不気味に思っていた努だったが、毎日の仕事や結婚準備に追われて次第に忘れていった。

「今日あたり、そろそろひと段落つく頃かなと思って」

努が帰宅してビールを飲んでいると、穂波から電話が掛かってきた。

このところ、年末へ向けての山のような仕事で努は忙しく、穂波に電話することができていなかった。毎日深夜に帰宅し、かろうじてスーツを脱いで眠りにつく。努がそんな状態だということを知っている穂波も、電話を掛けることはせず、時々メールを入れるだけにしていた。

『おはよ！ 今日も1日頑張ろう！』

『忙しくても、ご飯はちゃんと食べてね』

穂波のメールはいつも短いひと言だった。努には、それがありがたかった。読むのに時間がかかったり疲れたりすることもなく、その上穂波は

「忙しくて大変な時は、返事なんてしなくていいからね」

と言ってくれていた。努はそれに甘えて本当に返事を送っていないのだが、努が穂波のメールで随分救われていることは確かだった。この2年半ほどで、穂波は努のことを深く理解していた。

「さすが穂波。今日は久々に日付が変わる前に帰ってこれたんだ。どっかで見てたんだろ？」  
からかう努に、穂波は言い返した。

「そうよ、ストーカーばりにね」

「こえ～」

「そ、女は怖いんだから」

穂波は笑いながら言った。

「それより週末なんだけど、仕事大丈夫？」

週末はクリスマスイブだった。いつものクリスマスには大したことはしないのだが、今年のクリスマスは恋人として過ごす最後のクリスマスなのだからと、ちょっと贅沢に過ごそうということになっていた。ただ、なにしろ努は忙しかったので、ホテルなどの手配は穂波に任せっきりだった。

「うん、大丈夫。それより全部任せてごめんな」

「ううん、いいよ。そのかわり、私のしたいようにしたから」

穂波はいたずらっぽく言って説明を始めた。

「夕食はディナークルーズにしたの。生バンドの演奏を聴きながら食事ができるんだって。それにクリスマスだから特別に、豪華賞品のビンゴ大会とかもあるらしいわよ」

「へえ、そういうのあると燃えちゃうんだよな、俺」

「でしょ？ それでね、ホテルにチェックインした後は、バーとかには行かずに部屋で2人で過ごしたいなって思ってるんだけど、どう？」

「いいんじゃないか。ルームサービスでもとって、のんびりしよう」

努は答えながら、穂波へのプレゼントのことを考えていた。

――早く何か買っておかないとな。何がいいかな。結婚したらそうそういいものは買ってやれないしな。

「努？ どうかした？」

「え？ あ、いや、何でもないよ」

努は慌てて話題を変えた。

「それよりさ、穂波こそ年末は大丈夫か？」

正月休みを利用して、2人は努の故郷である大阪に帰る予定をしていた。

「もちろんよ。今からすごく楽しみにしてるんだから」

穂波は1度だけ努の両親に会ったことがある。努の留守中、穂波が努の部屋を掃除している時に、突然両親がやってきたのだ。東京の知り合いに不幸があり、努に連絡を入れる間もなく来たので、もし努が留守ならそれでいいと思いながらインターフォンを押した。そこへ「早かったのね！」と思いきり元気にドアを開けたのが穂波だったのだ。穂波から連絡を受けた努は、慌てて帰宅した。

――ややこしいことになってなけりゃいいけど。ま、2人ともさっぱりしてるから、もめるってことはないだろうけど。

家に着いて緊張しながらドアを開けると、にぎやかな笑い声が聞こえてきた。懐かしい大阪弁も聞こえる。

「あら、もう帰ってきたん？ もっとゆっくりしてきたらよかったのに」

母は笑ったままで努に言った。

「ゆっくりだったって……」

「今ね、お父さんとお母さんに努の子供の頃の話、聞いてたのよ」

穂波は努にお茶を入れながら言った。

後で穂波に聞いた話では、玄関で顔を合わせた時には、さすがに3人とも一瞬『固まった』という。あまりにびっくりして、誰からともなく笑い出した。とりあえずそれぞれ自己紹介をして、いざ話し出すと盛り上がってしまったらしい。特に母親とは馬が合うようで、お互いすっかり気に入ってしまった。努は、まるで本物の親子のように笑い合っていた穂波と母親を思い出し、ほっとした。

穂波と結婚の約束をした時、努が両親に電話で報告すると、両親、特に母親は大喜びだった。とにかく1度帰ってこいとうるさいので、ゆっくりできる正月休みに2人で帰ることにしたのだ。

穂波もたびたび、きちんと会って結婚の報告をしたいと言っていたので、努がこの提案をした時には手を叩いて喜んだ。早速母親に電話をし、2人で観光に出掛ける相談までしている穂波を見ながら、努は苦笑いしたものだ。

「よし、終わった！」

努が書類をトンと揃えて呟くと、同僚が耳ざとく聞きつけてからかった。

「今日はやけに張り切って仕事してたな。そりゃそうだよな、今日はクリスマスイブだもんな。どうせフィアンセとおデートなんだろう」

努は笑って手を上げ、早々に会社を後にした。

結局、クリスマスプレゼントを買えていなかったのだから、努は慌ててデパートに立ち寄った。穂波との約束の時間まではもう1時間もない。何にするかはだいたい考えていたので、努はすぐさま売り場に向かった。

商品を包装してもらっている間、何気なく店内を見回していると、目の端に見覚えのある何かが見えた。しかしそちらを向いても何もない。

努は身震いした。その『見覚えのあるもの』とは、島田華澄の顔のようだったからだ。――そういえば最近、よく背中に視線を感じるんだよな。まさかあの女が俺をつけ回してる？

「お客様？」

店員の怪訝そうな声でハッとすると、既に包装された商品が目の前にあった。

「何か間違いがございましたでしょうか？」

遠慮がちに聞く店員に、努は慌てて手を振った。

「いえ、大丈夫です。ありがとう」

商品を受け取って歩きながら、努は深呼吸をした。

――落ち着け。あの女のわけがないだろう。気のせいさ。ちょっと疲れてるんだ、俺は。

「せっかくのクリスマスなんだからな」

努は声に出して言うと、穂波との待ち合わせ場所へ急いだ。

ディナークルーズに集まった人たちは、当然のようにカップルばかりだった。特別な1日を過ごそうと皆が張り切っているようで、同じようにおしゃれをし、同じようにワイングラスを傾け、同じように愛を囁き合う。努にはそれが少し滑稽に見えたが、穂波はとても楽しんでいたし、何より嬉しそうだった。穂波の嬉しそうな顔を見ると、何でもしてやりたくなる。

――これが惚れた弱みってところかな。

努はそう思いながら、気恥ずかしさを頭から追い出した。

料理が運ばれてきた。白い皿に色とりどりのソースと食材で、まるで絵を描くように美しく盛り付けられている。

「うわぁ」

穂波がまた嬉しそうな顔で皿を眺める。

「こんなに綺麗だと、食べるのもったいないよね」

「1種の作品だもんな。どんな料理でもそうだけど、料理ってさ、技術だけじゃなくて美的センスも大事なんだなっていつも思うよ」

努が真剣に話すと、穂波がからかった。

「へえ、努がそんな風に考えてたなんて、ちょっと意外」

「俺って結構繊細だろ？」

努が言うと、穂波は吹き出しながらふざけて言った。

「じゃあこれからは、繊細な旦那様に認めてもらえるように、料理の腕だけでなくセンスにも磨きをかけることにします」

シャワーの音が小さく聞こえてくる。努はビールを片手にベランダに出た。

海辺にあるそのホテルは、全室から見える夜景をウリにしていた。穂波の知り合いがこのホテルで働いているお陰で部屋が取れたが、普通ならかなり早くから予約を入れなければならないくらい、人気が高い。

努は夜景を眺めながら、島田華澄のことを考えていた。考えないようにしても、どうしてもあの顔がちらついてしまう。

——デパートで見かけたのは、やっぱり島田華澄だった。だからと言って、俺をつけていたというのは極端すぎやしないか？ よく視線を感じていたのは気のせいかもしれないし……。そうだな、女なんだから、デパートでショッピングなんてのはよくやるはずだしな。

努はそんな風に思おうとした。しかしどうしても気になることがあった。島田華澄は傘を拾ってもらったというだけで、わざわざ努の会社を探し出して待ち伏せしていたのだ。その執念深さは少し異常のような気がした。

——それにあの目。冷たいような、それでいて燃えているような目。

「……とむ、努！」

努がハッとして振り返ると、バスローブを着た穂波が窓のところに立っている。考えごとに夢中になって、穂波が出てきたことに全く気付いていなかった。

「どうしたの？ ぼーとしちゃって」

穂波もベランダに出てきて努に並んだ。

「ちょっと考えごとをしてたんだ」

「考えごと？ 会社で何かトラブルでもあったの？」

努の顔を心配そうに覗き込んだ穂波の肩を抱き寄せて、努は言った。

「そうじゃないよ。結婚したら、こんな贅沢なクリスマスは過ごせないなって思ってたさ」

「な～んだ」

穂波はほっとしたように、努の肩に自分の頭を預けた。

「でもね、結婚してもクリスマスのお祝いはしようね。2人っきりでキャンドルをともしてワインも飲むの」

「そうだな、そうしよう」

「でね、子供ができたら大きなツリーを買うの。毎年飾り付けをして、努はサンタさんの格好をして、プレゼントを子供たちの枕元に置くの。子供たちは朝になったら大喜びするわ、きっと。そんな時、努は初めて見たような顔で言うの。『よかったな』って」



穂波は穏やかにそんな話を続ける。努は穂波を心底愛しいと思っていた。

——俺は穂波と一緒になら、穂波のためなら、どんなことだってできる。何があっても平気だ。くだらないことを心配するのはよそう。

「穂波……」

努は穂波に優しくキスをし、強く抱き締めた。

「幸せになろうな」

努が囁くと、穂波は努の胸に額をつけたまま、小さく頷いた。

穂波がくしゃみをして慌てて部屋に入るまで、2人は幸せをかみしめるかのように、長い時間をかけてキスを繰り返していた。

翌日、努が帰宅すると、ドアのノブに何やら紙袋がかかっていた。

「何だこれ」

ひとり言を言いながら部屋に入って見てみると、紙袋には見慣れない文字で『メリークリスマス！』と書かれたカードがつけてあった。

——もしかして……

嫌な予感がした。

カードを開くのは後回しにして、努は紙袋を開けた。中にはセーターが入っていた。しかも、どう見ても売り物には見えない代物だ。穂波がサプライズプレゼントにこっそり置いていったという希望的観測はここで消え去った。穂波は編み物が得意なのだ。第一、穂波には昨夜もらったばかりだ。買おうとすると高がつきそうな、複雑な模様が入った手編みのセーターだ。穂波は毎年、おしゃれなセーターを編んでくれる。センスがよくて、あまりにもうまいので手編みに見えないところが気に入っている。自分だけが手編みと知っているというのは、とても気分のいいものだった。

——これは穂波からのプレゼントではない。ということは……。

努の背中を冷たいものが通った。

——いや、わざと下手に編んで驚かせようとしたのかも。

そんなわけがないことは努にも分かっていた。穂波がそんなことをする理由は何ひとつないのだから。

努は大きく深呼吸して、恐る恐るカードを開いた。

メリークリスマス！

努さん、最近忙しそうだったので、ここに置いておきます。

セーター、一生懸命編んだので着てくださいね。

大きさがだいたいなので心配なんだけど、ぴったりだといいな。

あなたの華澄より

努はカードを手にしたまま、しばらく身動きが取れなかった。

――『あなたの華澄より』だって？

努には、島田華澄が何を考えているのか、さっぱり分からなかった。ただただ気味が悪かった。それ以上カードを見ているのも嫌で、セーターと一緒に紙袋に放り込んだ。

――明日のごみの日に出そう。いや待てよ、あの女はここまで来たんだ。これを処分しているところを見られる可能性もある。あんまり刺激しないほうがいいのかな。

努が考えこんでいると、静かな部屋にけたたましい音が鳴り響き、努は思わず飛び上がった。落ち着いてみると、それは電話だった。

「努さん？ 私、華澄よ」

そんな声が聞こえてくるのではないかと思った努は、電話に出ることができなかった。部屋の隅で息をひそめて電話を見つめていると、しばらくして電話は黙り込んだ。しかし、ほっとしたのも束の間、また電話が鳴りだした。

「ずっと出ないわけにもいかないよな」

努は声に出して自分を奮い立たせて受話器を取った。

「もしもし」

「もしもし努？」

穂波の明るい声が聞こえてきて、努はほっとしながら言った。

「なんだ穂波か」

「なんだはないでしょ。さっきも掛けたのに、出ないから心配しちゃったじゃない」

「さっきの電話も穂波だったんだ。ごめんごめん、ちょっとトイレに行行って」

努は自分の馬鹿げた不安に笑い出したくらいだった。

――そりゃそうだよな、いくら何でもあの女から掛かってくるわけないよな。第一、電話番号だって分からないのに。

「そうなんだ。ならいいんだけど。あ、そうそう、電話したのは年末の件なの。肝心の待ち合わせの約束してなかったじゃない？」

「あ、ほんとだ。すっかり忘れてたな」

「2日間ずっと一緒にいたのにね」

穂波はくすくす笑った。

約束をして、しばらく他愛のない話をしてから穂波との電話を切る頃には、努の心は軽くなっていた。

「さてと、片付けるか」

努が洗濯に取りかかろうとした時、また電話が鳴った。

「穂波のやつ、また何か言い忘れたのかな」

努は苦笑いしながら電話に出た。

「今度は何を忘れたんだ？」

「よかった、帰ってたのね」

「……！」

「私、華澄よ。プレゼント見てくれた？」

努は凍りついて声も出せなかった。

「努さん？ どうかしたの？」

「ど、どうかしたのかって……」

やっとのことで声を絞り出した努は、なるべく感情的にならないように気をつけながら聞いた。

「どういうつもりですか？」

「え？」

「なぜ、あなたは、こんなものを、俺に渡すんですか？」

一語一語区切って言う努に、島田華澄はこともなげに答えた。

「そりゃ努さんに着てほしいからよ」

「いや、そうではなくて」

努は深呼吸して続けた。

「俺はあなたにこんなものをもらう筋合いはないんですよ」

するとなぜか島田華澄は笑い出した。しかも楽しそうにケタケタと。

「やだ努さんったら、遠慮してるの？ いいのよ、気を遣わなくても。クリスマスに恋人に何かプレゼントしたいって思うのは当然なもの」

努は頭が痛くなってきた。ガンガンする頭を押さえながら、努はため息をついた。

「あの、島田さん」

「華澄って呼んで」

「……俺はあなたの恋人でも何でもないし、遠慮してるわけでも気を遣ってるわけでもないんです。だいたい俺の家や電話番号をどうして知っているんですか」

「当然じゃない、恋人なんだから」

「島田さん……」

「華澄って呼んで！」

いきなり島田華澄が叫んだ。努は一瞬ひるんだものの、すぐに気を取り直して怒鳴り返した。

「いいかげんにしろ！ もう2度と電話するな！ 家にも来るな！」

「何を怒って……」

まだ島田華澄が何か言うのも聞かず、努は受話器を叩きつけるようにして電話を切った。

「どうしたんだよ、浮かない顔で」

翌朝出社すると、同僚が声を掛けてきた。

「週末のおデートで疲れたのか？」

冷やかす同僚に答えるのも億劫で、軽く笑って席に着いた。すぐに仕事を始めるフリをして、それ以上の会話をさりげなく避けた。しかし、書類を出して眺めてみたものの、どうにも仕事に集中できない。

結局、セーターとカードは今朝のごみに出してきた。

島田華澄が何を考えているのか、努にはさっぱり分からなかった。ただ、島田華澄を刺激しようがしまいが、あのセーターを家に置いておくのは我慢できなかった。まるでセーターから島田華澄が出てくるんじゃないかと思うくらいだった。普通ならそんなこと考えつきもしないはずなのだが、それほど努は衝撃を受けていた。あの電話が掛かってきてからというもの、努はまたいつ掛かってくるかと心配でたまらなかった。今朝だって、わざわざいつもより早い電車出勤してきたのだ。

追い出しても追い出して頭を支配しようとする不安感と闘いながら、努はなんとか1日の仕事を終らせた。

キョロキョロしながら会社を出て、ビクビクしながら電車に乗って帰宅する。ようやくほっとした努の目に、ドアノブにまた何かぶら下がっているのが映った。意を決してそれを手に取る。袋に貼り付けたメモには、こう書かれていた。

お帰りなさい。

最近あまりちゃんとしたもの食べてないでしょ？

コンビニ弁当ばかりじゃ体に悪いから、お弁当を作りました。

しっかり食べてね。

あなたの華澄より

努はそれを読むなり握り潰し、袋をひつつかんでゴミ捨て場に向かった。

——あの女が作ったものなんて食えるか。まったく何なんだよ、あの女。コンビニ弁当ばかりじゃ体に悪いだと？ お前には関係ないんだよ。

心の中で毒づきながら弁当を袋ごとポリバケツに放り込んだところで、ふと疑問がわいてきた。

——待てよ。なんで俺がコンビニ弁当ばかり食べてるって知ってるんだ？

一瞬考え込んだ努は、自分が手にしたままのポリバケツの蓋を見て愕然とした。

——そうだ。今日はごみの収集日だった。まさかあの女、俺のごみをあさったのか？

島田華澄が笑いながらごみをあさっている姿が脳裏に浮かび、努は思わず身震いした。慌てて蓋を閉めて、部屋に戻る。

ネクタイをゆるめながらドカッとソファに座り込むと、待っていたかのように電話が鳴った。努はしばらく電話を見つめていたが、諦めて受話器を取った。

「どうしてセーターを捨てたの？ 気に入ってもらえると思ってたのに」

やはり島田華澄だ。

「2度と電話するな、家にも来るなといったはずだ。いいか、今度やったら警察に通報するからな！」

それだけ言うと、努は電話を切った。それだけでは物足りず、努は電話のコードも引き抜いた。冷蔵庫からビールを出して、勢いよく飲み干す。肩で息をつきながら、またソファに座り込み、頭を抱えた。

その後も毎晩のように電話がかかってきた。本当はずっとコードを抜いておきたいのだが、そういうわけにもいかない。努は電話が掛かるたびにすぐ切っていたのだが、島田華澄は諦めなかった。それどころか、自分の写真を送りつけてくるなど、ますますパワーアップしてきた。

1度警察にも相談してみたのだが、取り合ってはくれなかった。

「どうしてですか！」

「その程度じゃ、ストーカーとして訴えるのは難しいですね。何か危害を加えられたわけでもないし」

「でも毎日電話が掛かってきて、こっちは精神的に参ってるんですよ」

「それだって1日1回くらいでしょ。毎日何十回も掛かってきたら困りますけどねえ」

警官は何がおかしいのか、ニタニタしながら答えた。努は諦めて交番を出た。

——こうなったら自分で何とかしないと。でもどうしたらいいんだ？

そうこうしているうちに、大阪へ帰る日がやってきた。

努は疲れ果てていたが、大阪にいる間だけは島田華澄の電話から逃れられると思うと安心できた。それでもどこかから見られているのではないかと、内心ビクビクしながら待ち合わせ場所にいると、穂波が向こうからやって来るのが見えた。

「おはよ！ 待った？」

相変わらず元気だ。そんな穂波の笑顔を見て、努は一気に心が和むのが分かった。

「いや、俺も今来たところ。行こうか」

穂波の荷物を持ってやりながら歩き出す。

「しかし穂波の荷物はいつも重いな。いったい何が入ってるんだ？」

「女の子はね、色々必要なもんがあるの。それに今回は、お父さんとお母さんへのプレゼントも入ってるから余計に重いのよ」

「そんな気遣わなくてもいいのに」

「私も初めはそこまで考えてなかったんだけどね、この前ショッピングしてたらきれいな色のショールを見つけたの。お母さんにどうかなって思った時にはレジに並んでた」

穂波は肩をすくめて笑いながら言った。

「で、親父のは何にしたんだ？」

「お父さんのは手袋。ほら、毎朝犬の散歩に行ってるじゃない？ だから、暖かくてしっかりしたやつにしたの」

努は感心した。いつも穂波は相手の細かいところまで考える。自分だったら何にしたらいいのか困り果てるどころだ。

「2人とも大喜びするよ、きっと」

案の定だった。

「いやあ！　きれいな色やなあ！」

母親は大喜びで肩に掛けて鏡の前でポーズをとったりしている。

「どない？　似合ってるやろ？　きっと土台がええから余計似合うねんな」

父親に何回も言うのだが、父親は父親で手袋に夢中だった。はめてみて指を動かしてみたり、犬にみせびらかしたりしている。

「ほんっと2人とも、子供みたいだろ」

努が穂波にこっそり耳打ちすると、穂波は笑いながら答えた。

「これだけ喜んでもらえたら、あげるほうも嬉しいわ」

「ほら、ポチも羨ましがってるわ」

ようやく落ち着いた父親が、努たちの方へ来ながら言う。

「羨ましがるわけないだろ」

努が言うのを無視して穂波が父親に聞く。

「犬の名前、ポチっていうんですか？」

「そや、ええ名前やろ」

「ええ名前て、まったくひねりがないやん」

努が思わず突っ込む。無意識のうちに大阪弁に戻っている。

「何を言うてんねん。犬といえはポチやがな。犬を飼ってポチとつけんでどないすんねんな」

「そなんん言うて、単に考えんのめんどくさかっただけやん」

「ま、そうとも言うわな」

あっさり認める父親に努が苦笑いをしていると、穂波は肩を揺らして笑っている。あまりに笑いすぎて、涙まで流している。

「どうしたん、穂波？」

「だって……」

まだ笑いながら穂波が言う。

「漫才を見てるみたいなんだもん。それに努の大阪弁も初めて聞いたし」

そう言われて初めて、努は自分が大阪弁に戻っていることに気付いた。

「東京で親父としゃべってても戻らへんのかな。こっち帰ってきたら戻ってまうねんな。なんでやろ」

「きっと周りの雰囲気そうさせるのよ」

「東京で親父としゃべっても戻らへんのにな。こっち帰ってきたら戻ってまうねんな。なんでやろ」

「きっと周りの雰囲気そうさせるのよ」

「雰囲気？」

「うん。何て言うのかな。パワフルっていうか、生命力が満ち溢れてる感じがするの。ここにいると元気がもらえる、みたいな」

「ふ～ん、そんなもんかな」

「そんなもんやで」

めちゃくちゃなイントネーションで穂波が言う。努と穂波のやりとりを黙って聞いていた父親が吹き出した。努も笑いながら

「イントネーション、全然ちゃうで」

と突っ込むと、穂波は恥ずかしそうに笑いながら言った。

「やっぱり？ だって大阪弁って外国語みたいなんだもん」

「2人とも1週間こっちにおるんやろ？ ほんなら穂波さんもちょっとは大阪弁に馴染むんちゃうか？」

父親が言うので、努も同調した。

「せやな。それにオカンと観光すんねやろ？ たぶん1日中、大阪弁講座してくれんで」

言いながら母親を見ると、母親はまだ鏡の前でポーズをとっていた。

「オカン、いつまでやってんねんな。もうええからお茶でも入れてや」

「ああ、自分に見とれて忘れとったわ」

ストールを肩に掛けたまま台所に入っていく母親に努があきれ返っていると、穂波がまた楽しそうに笑った。

事件が起きたのはその2日後だった。事件、と言うのは大げさかもしれないが、少なくとも努にとっては大事件だった。

穂波は朝から母親と一緒に出掛けた。母親は穂波に大阪を堪能してもらおうと、本まで買い込んで研究したらしい。

「完璧に無駄のないスケジュール組んだからな。穂波さん、今日は脚が棒になるん覚悟しときや」

そういう母親に、穂波は靴を見せながら言った。

「そうなると思って、ほら、歩きやすい靴を持ってきたんですよ」

早くも息ぴったりだ。努は嬉しいような、恐ろしいような、複雑な気分だった。

――穂波も年をとったらあんなオカンになんねやろか。

そんな努をよそに、2人は元気に出掛けていった。

「大阪っておいしいものがたくさんあるんですよ？」

「そうや、だから今日は食べまくるで！」

「やった！」



2人の声は玄関を出てもまだ聞こえてくる。近所の人もびっくりしているだろうと、努は苦笑いした。

2人の声は玄関を出てもまだ聞こえてくる。近所の人もびっくりしているだろうと、努は苦笑いした。

努はというと、今日は午後から高校時代の友人たちと会うことになっていた。昼食は父親と適当にとって出掛ける。

待ち合わせは母校だ。努は自分が1番乗りだと思っていたのだが、着いてみると既に全員揃っていた。

「おう、寺本。久しぶりやな」

「なんやお前ら、早いなあ。俺が1番やと思っとったのに」

「お前、全然帰ってこんから、皆の顔忘れてんのちゃうかと思ってな。こうやって皆揃ってたら分かるやろ」

「アホか。こんなアクの強いメンバーを忘れるわけないやん」

ワイワイしゃべりながら、早速学校に足を踏み入れた。

努が通っていた学校は男子校だった。スポーツの盛んな学校で、グラウンドや体育館には朝から晩まで掛け声が響いていた。そんな中で努はクラブには属さず、いわゆる帰宅部だった。努と同じく帰宅部だった4人のクラスメイトと親しくなるのに時間はかからなかった。

努たち5人は、学校帰りに映画を観たり誰かの家でひたすら漫画を読んだりしていた。だが努が東京の大学に入るために引っ越してからは、少しずつ疎遠になっていった。大阪に残った四人も、新しい友達との付き合いやサークル活動に追われて、あまり連絡を取らなくなっていたようだ。それが、3年前にあった同窓会をきっかけに、またちょくちょく会うようになった。と言っても努はその同窓会以来、大阪に帰ってくるのは初めてだったのだが。

学校に入ると、努がいた頃とは随分変わっている。グラウンドから聞こえてくる声は変わりがなかったが、新しい校舎が建ち、体育館やプールの位置も変わっていた。

「なんかめっちゃ変わったなあ」

「そらそうやで。俺らが卒業してどんだけ経ってると思ってんねん」

「寺本は俺らと違って、ここを通りかかるってことないもんな。そらびっくりするわな」

「せやな。俺らは変わっていく様子を見てたから、それほどでもないけどな」

するとひとりが言い出した。

「食堂行ってみようや。近所の子に聞いたらメニューもだいぶ増えたらしいで」

「冬休み中やのに開いてるか？」

「冬休みでもクラブはあんねんから、開いてんのちゃう？」

「まあとりあえず行ってみよか」

そんなわけで、5人はゾロゾロと食堂に向かった。残念ながら営業はしていなかったが、飲み物の自販機コーナーがあるため開いてはいた。

5人はメニューを見ながら口々に言い合った。

「あ、俺がよう食べてた玉子丼、値上がりしてるやん」

「何あれ、カルボナーラとかあんで。俺らの頃には考えられへんかったのになあ」

「俺のお気に入りがなくなってる！」

ひとしきり騒ぐと、皆は何となく黙り込んだ。

「……14年か」

「俺らも年とるわけやな」

「あと4年であの頃の倍生きてることになんねんもんな」

そう言いながら、5人は何か飲もうと自販機コーナーの方に向かった。

その時だった。努の足が凍りついた。

少し離れた自販機コーナーに、見覚えのある姿があったのだ。後姿だったが、努は確信した。  
——島田華澄！　なんであいつが……。

「何してんねん、努」

ひとりが努を振り向いて言った。

「呑みに行こうや」

「え？」

「こんなところでジュース飲むよりミナミでも行って呑もうや」

「その前に休憩しようや」

友人たちは急にそんなことを言い出す努に戸惑いながら言った。しかし努は引き下がらなかった。

——とにかくあの女がこっちを振り返る前にここを出て行きたいんだよ。

努はドアの方に足を向けながら、半ば強引に言った。

「ええから行こうや。腹減ってきたし」

「しゃーないな。お前はほんまにマイペースやなあ」

友人たちは苦笑いしながら努についてきた。

努たちが出て行き、静かになった食堂には島田華澄だけが残った。島田華澄はゆっくり振り向き、努がいた方向を見て微笑んだ。

「あんな……」

翌日の夕食時に努が切り出した。父親と母親、穂波と努の四人でのんびり鍋をつついてる時だった。

「早めに引っ越そかと思ってんねん」

「え？」

びっくりしたのは穂波だ。

「どうして？　努、『けじめをつけたいから結婚前から一緒に住むのはやめよう』って言ってたじゃない」

「確かにそうやねんけど、よう考えたらもうだいたいの場所は決めてんねんし、早く引っ越した方が落ち着くんちゃうかと思ってん」

「そうなんだ……」

穂波は何となく腑に落ちない様子だ。

「やっぱアカンかな？」

「ううん、だめじゃないよ。ほんとに努がそうしたいって思うんならね。でももし、前に私がそうしたいって言ったからってことなら……」

「ちゃうちゃう。考えてみたらほんまにその方がいいと思ってん」

「なら私はもちろん賛成よ」

穂波は微笑んだ。

「で、親父とオカンはどう思う？」

努は両親の方に向き直って聞いた。

「お母さんらは別にどっちでもええよ。なあお父さん？」

「うん。2人がええようにしたらええで」

穂波と両親の賛成を得て、努は安心した。

——これであの女から逃げられる。

「よし、帰ったら早速物件めぐりしないとね！」

張り切っている穂波を横目で見ながら、努は考えていた。

「疲れた～！」

努は床の上に大の字に倒れこんだ。

結局、物件をまわって決定し、家具を選んだり荷造りをしたりで、引越は2月の上旬になってしまった。相変わらず島田華澄からの電話は掛かってきていたが、それ以上のアプローチはなかった。

穂波は笑いながら言った。

「お疲れ様。でもこれで終わったわけじゃないのよ。片付けはこれからなんだから」

「そうだよな。それが大変なんだよな」

「私、しばらくお休みとってるから、毎日通って片付けるわ。早く住める状態にして、2人で住み始めたいもんね」

「頼むよ。穂波は片付けがうまいからな」

「そうやっておだてて、全部私にやらせようって魂胆でしょ」

穂波が軽く睨んでみせる。

「ばれたか」

努は笑いながら言って立ち上がった。

「今日はとりあえずこれで終わりにして、飯でも食いに行こう」

「そうね」

2人は連れ立って新居を出た。もうすっかり暗くなっている。

「うわ、寒……。何食いに行く？」

努が身震いしながら歩き出すと、穂波はまだ新居の前に立って眺めている。

「どうした？」

努が声を掛けると、穂波はマンションを見上げたまま言った。

「ここが、私たちのスタート地点になるんだなって思って」

何の変哲もないマンション。デザイナーズマンションのようにおしゃれなわけではないが、新しいのを使いやすそうなところが2人とも気に入っていた。オープンタイプのキッチンとリビングダイニング、それに来客用の和室と自分たちの寝室。これが努たちの新しい城だった。

努も穂波と並んで自分たちの城を眺めながら考えた。

——これで俺たちは本当に幸せになれる。もうこれからは、あの女からの電話に悩まされることもないんだ。

「行こっか。私、急にお腹すいてきちゃった」

穂波が努の腕に自分の腕をからめる。

「なんだよ、切り替え早いなあ」

努は笑いながら言った。

2人は幸せをかみしめながら、ゆっくりと歩いた。そう、確かに2人は幸せだった。努の考えが甘かったことに気付くまでは。

「あ、穂波？ 俺だけど」

『努？ どうしたの？』

「今ちょうど外に出る用事があたらさ。調子はどうかと思って」

『陣中見舞いってわけね』

穂波は笑った。

『調子よく進んでるわよ。とりあえず寝室はほとんど片付いたし』

「へえ、早いな」

『でしょ？ もしかしたら努がいない方がはかどるかも』

「それはひどいなあ」

2人は声を揃えて笑った。

『ねえねえ、それよりね、早速お友達ができたのよ』

「え、もう？」

『うん。もうひとつ空いてる部屋あったじゃない？ あそこに今日引っ越してきた人なの』

「そりゃすごい偶然だな」

『そうなの。挨拶に来られた時に話がはずんじゃって、ランチも一緒にしちゃったの』

「よかったじゃないか。新しいところに友達ができると心強いよな」

『うん、お互い不安だもんね。華澄さんも、あ、華澄さんっていうのはその人の名前なんだけどね、華澄さんも不安だったからよかったって喜んでたわ』

努は自分の体がこわばるのが分かった。

「か...すみ？ その人、名字は何ていうんだ？」

『確か島田さんって言ったかな。どうして？ 知ってるの？』

「あ、いや、そうじゃないんだけど。それよりさ、片付けはその辺にして、今日はもう帰ったらどうだ？」

『え、なんで？』

「そんなに熱中してやったら疲れるだろ？ 明日の打ち合わせもあるんだし、もう帰った方がいいんじゃないか。な？」

いつになく強引な努に戸惑いながらも、穂波は素直に従った。

『うん、分かった。じゃあ帰るね』

「気をつけてな」

努は電話を切ると、しばらく動けずにいた。まるでそこに島田華澄がいるかのように呟いた。

「どこまで俺を追い回せば気が済むんだ」

「もしもし、寺本だけど」

『おう、久しぶりだな』

いつもの口調で隼人がのんびり答える。

「急で悪いんだけどさ、今晚会えないか？」

『いいけど。どうした？ 何かあったのか？』

「ちょっと相談したいことがあって」

『珍しいな。じゃあ例の店で待ってるよ』

隼人との約束を取り付けて、努は少しほっとした。今まで誰にも相談しなかったのだが、もう限界だった。

——もう俺ひとりではどうにもできない。あいつなら何かいい手を考えつくかもしれない。それに確かあいつの叔父さんは刑事だったはずだ。何とか口を利いてもらえるかもしれない。

そう考えると、急に気が楽になった。

——絶対に穂波との生活は守り抜いてやる。

努は強く決意した。

「おう、こっちこっち」

努が店に着くと、隼人は既に着いていた。マスターに挨拶すると、努は隼人の腕を取りながら言った。

「奥の席で話してもいいか？」

「なんだよ、深刻な相談か？ まさか浮気でもしたか？」

隼人はからかったが、努の顔を見てただ事ではないと察したらしい。黙ってテーブル席までついてきた。

努はグラスをいじりながら、なかなか口を開こうとしない。いつもと違う努の様子に、ただならぬものを感じ取った隼人も黙って待っていた。

しばらくためらっていた努は、気合を入れるかのように深呼吸をしてから話し出した。

「実はある女にストーカーをされてるんだ」

努が島田華澄と出会ってから今までのことを話す間、隼人は黙って聞いていた。

「で？ 今日穂波ちゃんは帰ったんだな？」

「うん、帰るって言ってた」

「明日は？」

「明日は俺と朝から会うことになってる」

「そうか、とりあえずは安心だな」

隼人は煙草の煙を吐きながら考えた。

「でもその女、どうにかしないと。もしお前らがまた引っ越したとしてもついて来るだろうし」

「そうなんだ。まさか引っ越してくるとまでは思ってなかった。甘かったよ」

うなだれる努に、隼人が厳しく言った。

「がっかりしてる場合じゃないぞ。お前を狙うということは、穂波ちゃんにも危険が及ぶ可能性が高いんだからな。お前がしっかり守ってやらないと」

その頃、島田華澄は努たちの新居のマンションの外にいた。見上げると、新居の部屋にはまだ明かりがついていた。島田華澄は窓を見上げたまま、薄く笑った。

「ふう、終わった」

穂波はリビングを見回して呟いた。

大きな荷物はだいたい片付いた。あとは小さい荷物を片付けていけばいい。

「努、びっくりするだろうな」

想像して笑いながら、穂波は考えた。

——それにしても、なんで急に『帰れ』なんて言い出したんだろ。明日の打ち合わせは1日かかりそうなんだし、今日ギリギリまでやっちゃったほうがいいのに。『帰る』って答えたのに帰らなかったから怒るかな。

「ま、いっか。こんなに片付いたんだもん。怒るわけないよね」

さすがに疲れた穂波は、今度こそ本当に帰ることにした。最後に部屋を見回し、部屋を出ようとすると、玄関のチャイムがなった。

——新聞の勧誘だったら嫌だな。

そう思いながらドアを開けた穂波は驚いた。

「あら」

「こんばんは」

ドアの外には島田華澄が立っていた。

「とにかく1度、叔父さんに話してみよう。お前が直接警察に行ってダメなら、叔父さんから話を通してもらおう。お前はしばらくそのマンションに近寄るな。もちろん穂波ちゃんもだ」

「わかった」

努は神妙な顔で頷いた。いつもヘラヘラしている隼人が真剣に話しているのを見ると、より一層、事態は深刻に思えた。

「こんばんは」

ドアの外に立っている島田華澄を見て、穂波は驚いた。てっきりもう帰ったものだと思っていたのだ。

「帰られたんじゃないんですか？」

「ううん、2人で引っ越し祝いをしようと思って、お買い物に行ってたんです」

島田華澄は手にしたビニール袋を持ち上げてみせた。

「あ、もしかしてもう帰るところでした？」

穂波がコートを着ているのに気付いた島田華澄に、穂波はコートを脱ぎながら言った。

「そうだったんですけど、せっかくだからお祝いしましょ」

「でもそれじゃあ悪いわ。ご両親も心配するだろうし」

「親にはもしかしたら泊まってくるかもって言ってあるんです。さ、遠慮せずにどうぞ」

穂波はダンボールから出したばかりの真新しいスリッパを並べた。

「じゃ、お邪魔します」

島田華澄は中に入ってドアを閉めた。

「ただし、まだちゃんと片付いてないからゴタゴタしてますよ」

穂波はおどけて言いながら、奥のリビングへと歩いていく。その後姿を見ながら、島田華澄はそっとカギをかけた。

その瞬間、穂波の運命が決まった。



努は携帯電話に表示された時計を見た。もう約束の時間を15分も過ぎている。穂波は時間にはいつもきちりしているのに、遅れることなんてめったにない。

努は穂波の携帯に連絡を入れてみた。

『お客様のお掛けになった電話番号は、電源が入っていないか……』

何度掛けても同じメッセージが流れるばかりだった。努は違う番号を押した。

『もしもし』

いつ聞いても穂波とそっくりな声が聞こえてきた。しゃべり方でかろうじて母親だと分かるくらいだ。

「もしもし、寺本です。おはようございます」

『あら、努さん。おはよう』

「あの、穂波さんはもう起きてます？」

『穂波？』

「ええ、今日は式場で打ち合わせがあって約束してたんですけど、珍しくまだ来ないので」

『昨日は新居に泊まったんじゃないかしら』

「え？」

『出掛ける前に、もしかしたら泊まってくるかもしれないって言ってたから』

努は胸がざわつくのを感じた。

『携帯には電話してみた？』

「はい、でも電源が入ってないみたいで」

『もう、あの子は何をしてるんだか。ごめんなさいね』

穂波の母親は申し訳なさそうに謝った。きっと電話の前で頭を下げているに違いない。

「いえ、じゃあもう1度携帯に掛けてみます」

穂波の母親との電話を切ると、努はもう1度穂波の携帯に掛けてみた。だが結果は同じだった

。

『お客様の……』

努は電話を切るが早いか、駅に向かって走り出した。

電車を降りて新居まで、努はかつてない程に必死で走った。クラス優勝がかかった運動会でも、ここまで必死ではなかったくらいだ。普段運動をしていないので、たちまち足が重くなってくる。それでも努は足を緩めなかった。

マンションに着いたとき、ちょうど管理人がほうきとチリトリを持って出てきた。

「わっ！」

危うく努とぶつかりそうになって尻もちをついた管理人は、お尻をさすりながら立ち上がった

。

「危ないじゃないですか」

「すみません、急いでたもので」

「確かこないだ引っ越してきた、えーと……、寺本さんでしたよね？」

「はい」

初めて管理人と会った時、話しやすそうで安心した努だったが、今はそれが恨めしかった。努には、ほんの少しの時間ももったいなく思えた。

「ほんとにすみませんでした」

努は頭を下げて、エレベーターへ急いだ。

——早く、早く来い。

じりじりしながら待っていると、管理人が努の隣にやってきた。

「そんなに急いで何かあったんですか？」

「ええ、ちょっと……」

努は数字を見詰めながら答えた。管理人は話の続きを待っているようだ。努が言うまではくっついてくるかもしれない。努は心の中で舌打ちをした。

「実は穂波が一彼女が昨夜帰宅してなくて。携帯にも出ないので、ここにいるのかと思ひまして」

全速力で走ってくる程の理由には足りなかったが、管理人は納得したようだった。

「それは心配ですねえ」

ようやく下りてきたエレベーターに努が乗り込むと、管理人も好奇心むき出しの顔で乗ってきた。

「何かあるといけませんから」

管理人は言い訳がましく言ったが、努は何も言わなかった。正直なところ、努も不安だったのだ。部屋に入ると島田華澄が穂波を縛り付けている光景が、さっきから何度も頭をよぎる。その度に必死でその妄想を打ち消し、単に寝坊しているだけの穂波を思い浮かべようとしていた。

努は部屋に飛び込むと、まず手前の寝室のドアを勢いよく開けた。

「穂波！」

だがそこには誰もいなかった。運び込まれたばかりのベッドがおとなしく居座っているだけだ。

その時、リビングを見にいていた管理人の叫び声が聞こえた。

「わー！」

努は慌ててリビングへ向かった。

「どうしたんですかっ」

「わわわ……」

管理人は窓の外を指したまま、腰を抜かしていた。努のいる位置からは何も見えない。

「管理人さんっ」

努が管理人のそばに寄ろうとすると、カーテンの隙間からスリッパが見えた。努の足が止まった。

――あれは……。

それは努と穂波と一緒に選んだスリッパだった。なかなか意見が合わずに、いくつもの店をまわって、ようやく見つけたものだった。努がブルーで穂波がピンク。あまりにもお約束っぽいかもしれないと思ったが、新婚を楽しめる時期には存分に楽しもうということで決めたのだ。

カーテンの隙間から見えるピンクのスリッパは、そこに穂波がいる可能性を大きくした。しかしそれと同時に、管理人の様子や動かない足は、最悪の事態を想像させた。

「わわわ……」

管理人はまだ腰を抜かしたままだ。努は意を決して足を踏み入れた。一步、また一步と窓に近づく。カーテンに手を掛け、深呼吸をする。ゴクリと喉を鳴らす。思い切ってカーテンを引いた。

思った通り、そこには穂波がいた。思った通り、最悪の姿で。

その頃隼人は、叔父である長沼と会っていた。もちろん、努と穂波の身に起こった悲劇については知る由もなかった。

「なるほど」

隼人の話を聞き終えた長沼は、腕を組んで頷いた。

「これは早急に手を打たなければ、大変なことになるかもしれないな」

「そうなんです。島田華澄は、寺本のことを勝手に恋人だと思い込んでいます。彼女にとって、穂波ちゃんは邪魔者でしかない……」

「早速、調べさせよう」

長沼は携帯を取り出し、部下に連絡を取った。

長沼は母方の叔父だ。早くに父親を亡くした隼人にとっては、父親がわりの人でもあった。刑事という仕事柄、忙しくてあまり会えないが、何かと気に掛けてくれている。ずんぐりむっくりで、丸い上に赤ら顔という容姿は、いかにも仕事のできなさそうなダメ親父といった感じを受ける。しかし実際は、頭の切れる、行動力のある有能な刑事だった。隼人はこの叔父に任せておけば何とかなると信じていた。

部下との電話を終えた長沼は、刑事の顔になっていた。

「隼人。どうやら手遅れだったようだ」

「え？」

隼人は一瞬何のことだか分からず、聞き返した。

「事件だ。今から現場に行く。お前も来い」

「まさか……」

「ああ。被害者は平石穂波、お前の友達の婚約者だ。新居で殺されていたらしい」

隼人は息をのんだ。

「どうして。穂波ちゃんは寺本に言われて昨日は帰ったはずなんです。それに今日は寺本と朝から会うって……」

「細かい事情は分からん」

長沼は席を立ち、伝票をつかんだ。

「すぐに馳部が迎えに来る。お前も行くんだ」

隼人は混乱する頭のまま立ち上がった。

店を出ると、ちょうど車がやってきた。

「チョウさん！」

馳部が車から顔を出し、長沼を呼んだ。

「あれ、隼人くん」

「お久しぶりです」

隼人が頭を下げると、長沼が車のドアを開けながら言った。

「挨拶は後だ。とにかく乗れ」

長沼の説明で隼人が被害者の知り合いだと知った馳部は、掛けるべき言葉が見つからなかった。

「寺本君が発見したらしい。かなりショックを受けているはずだから、お前がしっかりしてやらんとな」

そう言う長沼に、隼人が短く「はい」と答えたきり、現場に着くまでは誰も口を開かなかった。

何人もの刑事たちが動き回っている。努は指紋を取る様子を眺めながら、ぼんやりした頭で考えていた。

――帰れって言ったのに。俺がびっくりするだろうとワクワクしながら片付けてたんだろうな。

部屋をゆっくり見回すと、随分片付いている。

――そんなに頑張って片付けなくてもよかったんだ。早く帰っていたら、こんなことにはならなかったのに……。

努は頭を抱えた。

――穂波、お前がいなくなったら俺は……。

膝に落ちた滴で、努は自分が泣いていることに気付いた。

「穂波……、穂波……」

周囲に人がいるのも気にせず、努は泣き続けた。

「寺本！」

リビングのソファに座り込んで頭をかきむしっている努を見るやいなや、隼人は駆け寄った。

「水森……」

努は泣きはらしたうつろな目を隼人に向けた。

「いったい何があったんだ。昨夜は穂波ちゃん、すぐに帰ったんじゃないのか？」

「それが……」

努は辛そうに顔を歪めながら隼人に説明した。

「何てことだ」

隼人はやりきれない思いだった。

――穂波ちゃんを心配させないように島田華澄のことを話さなかった努と、努のために少しでも片付けておこうとして努の言うことを聞かなかった穂波ちゃん。お互いの、相手を思う気持ちの結果がこれかよ。

「俺が悪いんだ」

努が呟いた。

「俺が昨夜様子を見に来ていたら。俺があの子のことをきちんと話していたら。俺が傘なんか拾わなければ。俺が……」

「やめろ！」

隼人は怒鳴りつけ、努の隣に座って肩を揺すった。

「誰のせいでもない。悪いのは島田華澄だ。お前は悪くない。悪くないんだ」

努は黙って床を見詰めていた。

鑑識班が引き上げて行き、西日が差し込む部屋には努と隼人、それに長沼と馳部が残った。まるで何もなかったかのように静かだった。

「こんな時に申し訳ありませんが、少し話を聞かせてもらえますか」

長沼が長い沈黙を破った。

「だいたいのことは隼人から聞いていますが、もう一度詳しく話して頂けますか」

長沼の横で馳部が手帳を開いた。努は時折、涙を流したりため息をついたりしながら、長沼に説明をした。

「分かりました。それでその女の特徴なんですが、何かありますか」

努は考えながら答えた。

「それが、これといった特徴はないんです。髪は長くて真っ黒でした。顔立ちは……、あまり覚えてないんですが、細い顔でした。印象深い顔ではなくて、どちらかと言うと、のっぺりした感じを受けました」

「そうですか。では背格好はどうでした？」

「それもおごく普通の感じでした」

「そうですか」

長沼は落胆した様子だった。これといった特徴がないと、探し出すのもひと苦労だ。名前が分かっているのが救いだったが、偽名という可能性もある。

「何かないのかよ。なあ、ひとつくらい何か特徴があるだろ」

隼人は努に詰め寄ったが、努は黙って首を振るだけだった。

「とにかく今日は1度帰られて、体を休めてください。もしかしたら、また話を聞くことになるかもしれませんが」

長沼は努に言い、馳部に車をまわすように指示した。

「俺も一緒に行くよ」

隼人が立ち上がりかけたのを努は止めた。

「いや、いいよ」

「でも」

「ひとりになりたいんだ」

「……」

「頼む、水森」

隼人は、本当は何としてでもついて行きたかったのだが、渋々頷いた。

「分かったよ。でも俺の部屋に行くんだ。俺は今晚はホテルにでも泊まるから。絶対にそこから出るなよ。絶対にだ」

鍵を渡しながら言う隼人に、努は頷いた。

努は隼人の部屋に入ると、何をするでもなく座り込んだ。そろそろ夕食の時間だが、食べる気もしない。部屋を見回すと、殺風景ではあるが綺麗に片付いている。

「あいつはほんとにマメだな」

努は呟いた。

片付いた部屋を見ていると、穂波のことを思い出してしまう。また新たな涙が頬を濡らし、努は急いで顔を洗いに行った。

――こんなことではダメだ。今俺ができることをするんだ。穂波のために……。

鏡を見ながら努は気持ちを切り替えようとしていた。

その時、上着のポケットで携帯が鳴った。

――水森が心配して掛けてきたのかな。もう大丈夫って言ってやらないとな。

そう思いながら携帯の液晶画面を見ると、隼人ではなかった。隼人ならば、登録されているから名前が表示されるはずだ。

「誰だろ。長沼さんかな」

努は呟いて通話ボタンを押した。

「もしもし」

『これで私たち、結婚できるわね』

努は息を止めた。電話から聞こえてきたのは、島田華澄の弾んだ声だった。

「どういうことだ」

努は叫びだしたいのをこらえて聞いた。

「やっぱりお前がやったのか」

『だってあの女、私たちの邪魔をするんだもの』

「邪魔？」

『そう。あの女が、私と努さんの間に割り込んで来たんだもの』

「そうじゃない。お前が俺と穂波の間に割り込もうとしてたんじゃないか」

『違うわ。私のほうが先だった。なのにあの女、はしたなくも自分から努さんを誘うなんて』

「え？」

努は訳が分からなくなった。

——穂波が俺を誘ってって、いったい何のことを言ってるんだ？ それともこれもこいつの妄想なのか？

考えている努に、島田華澄は子供にでも話すかのように説明した。

『ほら、お友達のお見舞いの帰り、花屋の前で』

努は目を見開いた。自分でも気付かずに大声を上げていた。

「何だって！ お前はその頃から俺を……」

『初めて見たときから好きになったの』

島田華澄は昔を懐かしむように話した。

『満員電車に乗り込もうとしても、なかなか入れなくて困ってたの。そしたらその時、後ろから押してくれた人がいた。それがあなたよ。努さんは覚えてないかもしれないけど、私はしっかり覚えてるわ。体が密着してドキドキしたわ。その音が周りの人に聞こえるんじゃないかと心配になるくらい。恥ずかしくて、ずっと私は下を向いていたの』

島田華澄はうっとりしながら話していた。努にはまったく記憶にないことだった。

前にいる人間を押しながら電車に乗り込むのは、毎日していることだ。努だけではない。皆がしている。そうしなければ、満員電車に乗ることができないのだから。

『それ以来、私は毎日その車両に乗って、あなたを見てきたの』

島田華澄の話は続いている。

『ううん、それだけじゃない。電車を降りて、会社にもついて行ったし家までも行った。直接声を掛けるなんて恥ずかしくてできなかったけど、ただ見ているだけで私は満足だったの。いつかこの想いが努さんに届くと思っていたから。それなのに……』

島田華澄の声色が変わった。地に響くような声で島田華澄は続けた。

『あの女が現れた。あの女は私の努さんに手を出した。それだけならまだ我慢できたけど結婚することになった。私は決心したわ。努さんを取り返す。ううん、努さんを助けるって』

「助けるだって？」

『そうよ。あの女と結婚しても努さんは幸せにはなれない。だって努さんを1番愛しているのは私、—1番理解しているのも私。だから努さんは私と結婚すべきなのよ』

「勝手なことを言うな！」

『かわいそうに、努さん。無理しなくてもいいのよ。フィアンセが死んですぐ別の女性と結婚したからって、法には触れないんだから』

「無理なんかしてない！」

努は叫ぶように言った。

「お前は……、お前はそんな勝手な理屈で、妄想で、俺の穂波を……」

努の心の中は荒れ狂っていた。島田華澄への復讐の炎がメラメラと燃え上がっていた。

『だから言ってるじゃない。努さんを助けるためだって』

——狂ってる。この女は狂ってる。俺がこの手でピリオドを打ってやる。俺のこの手で、必ず。

努は決心した。大きく深呼吸し、穏やかに言った。

「分かったよ。君の言う通りかもしれないな。そこまで俺のことを想ってくれてたなんて知らなかったよ」

『やっと分かってくれたのね』

「ああ。確かに俺を1番愛してくれてるのは君かもしれないな」

『嬉しいわ』

努は声が震えるのを抑えて言った。

「それならさ、ちゃんと会わないか？ 俺たち、ちゃんと会って話したことないだろ？ これからのことも相談しないとな」

『そうね、そうしましょ』

島田華澄は楽しそうに言った。

『それならせっかくだから、うちに来ない？ ご馳走を作って待ってるわ』

「君の家って……」

『あそこじゃないわよ』

努の考えを見透かしたように、島田華澄は努の言葉を遮った。

『あそこじゃあんまりにも目立つものね』

島田華澄はくすくす笑いながら言った。

『あれはね、引っ越したふりをしただけなの。本当は別のところに住んでるのよ』



努は玄関に立って、部屋を見回した。

「ごめんな、水森」

主のいない部屋に向かって、努は呟いた。

隼人には置手紙をした。明日の朝、隼人が帰宅したらびっくりするだろう。本当なら隼人に連絡を入れて、警察と一緒にいくべきだということは分かっている。ひとりでいくのは危険だということも分かっている。しかし努は、それでもひとりで行きたかった。相手は女なのだから大丈夫だという考えももちろんあったが、それよりも穂波の敵は自分の手で討ちたかったのだ。

努は部屋を出た。闘いに決着をつけるために。

電車を乗り継いで教えられた通りに行くと、すぐに島田華澄の住む場所が分かった。驚いたことに、それは古くて大きな一軒屋だった。うっそうと繁った木々は不吉な感じがした。――このまま引き返して水森に連絡しようか。

弱気になった努が考えた時、ふと穂波と出会った日のことを思い出した。

――あの時引き返さなかったから、俺は穂波と付き合えたんだ。そうだ。引き返さなかったことで、俺はいい結果を手繰り寄せたんだ。

努の脳裏にいくつもの穂波の顔が甦った。怒った顔、泣いた顔、笑った顔……。努の心に穂波への想いと島田華澄への憎しみが再びあふれ出した。

――俺は引き返さない。必ずこの手で敵を討ってやる。

インターフォンを鳴らすと、島田華澄はすぐに出てきた。白いフリルのついたエプロンをつけている。

「は～い」

語尾にハートマークがつくほど甘い声で答えながら小走りにやってくる姿は、まるで新婚気取りだ。努は胃がむかつくのを感じたが、必死で笑顔を作った。

「びっくりしたよ。こんな大きな家だから」

家の中に案内されながら努は言った。

「祖父はお金持ちだったの。父と母は私が幼い頃に亡くなって、それから私は祖父に育てられたの。そりゃあ大切に育ててくれたわ。でも私が大学に入った年に、なくなってしまって……。それ以来、私はひとりで住んでるの」

「親戚とかはいないの？」

「いるかもしれない。でも会ったことはなかったし、祖父の残してくれたお金で生活もできたし、あえて捜しはしなかったの。寂しい時もあったわ。でも」

島田華澄はパッと表情を明るくして言った。

「これからは努さんがいるから平気」

廊下を進んでいくと、なにやらいい香りがしてきた。

「さ、どうぞ。ちょうど出来上がったところなの。ちょっと遅いけど、夕食にしましょ」

編み物は苦手でも、料理は得意らしい。テーブルにところ狭しと並べられた料理は、充分に食欲をそそるものだった。

——そういえば朝から何も食べてなかったな。

「努さんはここに座って。たくさん食べてね」

努は勧められるままに座った。

——まずは腹ごしらえだな。腹が減っては戦はできぬ、だ。

「さ、乾杯しましょ」

島田華澄は相変わらずはしゃいだ声だ。

努は島田華澄の様子を窺いながら食事をした。

——とにかく俺の気持ちを悟られないように、にこやかに話すんだ。そしてこいつが隙を見せた時には……。

「うまいね、これ。君って料理が上手なんだ」

「お料理は得意なの。だって母が亡くなってから、ずっと私が作ってきたんだもの」

そう言って微笑む島田華澄の顔が、少し揺らいで見えた。

——ん？ 何だ？

努は頭を振ってみたが、目の前にいるはずの島田華澄の顔はどんどん見えにくくなってくる。

「あら、もう効いてきたの？ もう少しゆっくりおしゃべりしたかったのに」

遠ざかる意識の中で、島田華澄の笑い声が聞こえた。

長沼らの捜査に特別に加わっていた隼人は、明け方近くになってようやくホテルにチェックインした。ベッドに座ってタバコをふかしていると、穂波を発見した時の努の様子が思い出された。

——あいつ、大丈夫かな。

長い付き合いの中で、あんな努を見たのは初めてだった。考えれば考えるほど、心配になってきた。腕を伸ばして携帯を取る。しかし、鳴らしても鳴らしても努の声は聞こえてこない。

「まさかあいつ、変なこと考えてないだろうな」

隼人はいてもたってもいられなくなって、ホテルの部屋を飛び出した。

その頃、努はようやく意識を取り戻しつつあった。少しずつ意識がはっきりしてくると、自分の手足が椅子に縛り付けられているのが分かった。かろうじて動く首を回して周りを見ようとしていると、背後から声が聞こえた。

「おはよう」

島田華澄が努の前に回りこんできた。

「これは一体どういうことだ」

怒りと恐怖で、努の声は震えている。そんな努に島田華澄は笑顔で答えた。

「努さんに攻撃されないように、先手を打ったのよ」

「……」

「そのつもりだったんでしょ？ 私を受け入れたとみせかけて油断させ、私を殺すつもりだったんでしょ？」

「な、何を言ってるんだ。俺はほんとに君のことを……」

努が必死で否定しようとする、島田華澄は大声で笑った。

「努さんって、ほんとに嘘をつくのが下手ね。でも私、そんな努さんも好きよ」

努はなんとかしてロープをほどこうと、手首を動かしながら言った。

「ロープをほどけ」

努の声には耳を貸さず、島田華澄はひとりで話を続けた。

「私と努さんは幸せに2人で暮らさなきゃ。だって私と努さんは、世界一お似合いのカップルなんだから」

「何がお似合いのカップルだ。そうだよ、俺はお前を受け入れてなんかないんだよ。俺が愛してるのは穂波だけだ。お前なんか、絶対に愛さない！」

相手を刺激してはまずいと思いながらも、努は自分を抑えることができなかった。方で息をしながらにらみつける努に、島田華澄は不気味なほど静かな笑顔を向けた。

「しょうがないわねえ」

駄々をこねる子供に言うように、愛情と諦めの入り混じった声で、島田華澄は言った。

隼人は部屋のカギを開けるのももどかしく、部屋に飛び込んだ。

「寺本！」

努はどこにもいない。狭い部屋だから、隠れていればすぐ分かるし、第一隠れる理由はない。

「何やってんだよ、寺本」

隼人が呟いたとき、テーブルの上の手紙に気付いた。

『島田華澄から電話があった。あの女、『これで私たち、結婚できるわね』なんて言いやがった。俺が穂波と出会う前から俺を好きだったのに、穂波がそれを邪魔した、俺と結婚すべきなのは自分だから、俺を助けるために穂波を殺したって。俺はあの女を許せない。俺は、俺から穂波を奪ったあの女を絶対に許さない。』

初めはお前に電話しようかとも思ったけど、警察の手ではなく、俺のこの手で制裁を加えることにした。水森、ごめんな、迷惑かけて』

「馬鹿野郎！」

隼人は見えない努に向かって怒鳴った。

「相手は頭がおかしいのに、お前の考えが通用するわけないだろ！」

手紙を握り締めて、隼人は部屋を出た。タクシーを拾うために大通りへと走りながら、長沼に電話をする。

『もしもし、隼人か？』

「おじさん！ 大変なんだ。寺本が……」

事情を説明すると、長沼は緊迫した声で言った。

『すぐそっちに行く。そこで待ってろ』

「しょうがないわねえ」

努は内心、ロープをほどいてくれるのかと淡い期待を抱いたが、島田華澄はそのままキッチンの方へ行ってしまった。

――俺は一体どのくらい意識を失ってたんだろう。

首を何とか動かして時計を見ると、針はちょうど六時を指していた。窓の外は明るくなり始めている。

――俺はこれからどうすればいいんだ。どうすればこのロープをほどけるのか……。

努が考えていると、島田華澄は大きな盆で食事を運んできた。

「今朝は洋風にしてみたの」

島田華澄が次々に食卓に皿や器を並べながら言う。

「フレンチトーストにサラダにハムエッグ、それからスープもあるわよ。牛乳もちゃんと飲んでね。デザートにはフルーツも冷やしてあるの」

昨夜と同じ、白いフリルのついたエプロンをつけて、島田華澄はまくしたてた。

「いただきま〜す」

元気よく手を合わせて、努を見て吹き出した。

「やだ、ごめんなさい。それじゃあ食べられないわよね」

「ほどいてくれるのか」

「それは無理よ。でも安心して。私がちゃんと食べさせてあげるから」

島田華澄は自分の椅子を努の隣に持ってきて座った。

「はい、あ〜ん」

フレンチトーストを努の口に運ぶ。しかし努は顔をそむけて拒否した。

「どうしたの？ 昨夜あんまり食べてないからお腹すいてるでしょ？」

「確かに腹は減ってるさ。でも食べない」

「やだ、また睡眠薬が入ってるとでも思ってるの？ もう大丈夫よ」

「そうじゃない。俺は、お前が作ったものを食べるのが嫌なんだ」

島田華澄の顔つきが一瞬変わった。しかしまたすぐに笑顔に戻り、椅子を元の位置に戻した。

「そう。じゃ、私は食べるわね」

――腹減ったな。でもこいつの作ったものを食べるなんてまっぴらだ。

努はやせ我慢をして顔をそむけ続けた。

努が失踪してから1ヶ月がたとうとしていた。

桜が満開になり、世間では花見だ何だと楽しそうだったが、隼人には桜を見る余裕はなかった

。

長沼ら警察は、努の行方を躍起になって捜していたが、なかなか見つからなかった。『島田華澄』という名前はやはり本名ではなかったようで、その名前の人物はどこにもいなかった。何人かの目撃証言があっても、特徴のなさが捜査の邪魔をしていた。

じりじりする思いで1ヶ月を過ごした隼人はもちろん、捜査陣にも焦りの色が見え出した頃、隼人の元に朗報が舞い込んだ。

『隼人、出掛ける準備をしておけ。今からそっちに寄るから』

「何か分かったんですか？」

『島田華澄らしき人物が見つかった。詳しいことは後だ』

隼人は息を飲んだ。

「分かりました。大通りに出て待ってます」

早口で言って、受話器を放り投げるように置く。素早く着替えて大通りまで走ると、間もなく赤いランプが見えてきた。

「おじさん！」

隼人は車が止まるのも待たずにドアにしがみつき、車に乗り込んだ。

「努は？ 努は島田華澄のところにいるんですか？」

勢い込んで聞く隼人を、長沼が手で制した。

「落ち着け、隼人。寺本くんがそこにいるかどうかは分からない。それどころか、そこにいる女が本当に『島田華澄』なのかも分からんのだ」

「どういうことですか？」

「そこに住んでいる女が似顔絵に似ているという通報があったんだ。だが調べてみると、その女の名前は牧野華澄となっている」

「牧野華澄……」

「そうだ。だが華澄という名前はありふれたものではないし、その女はこの1ヶ月ほど、ほとんど外出していないらしい」

「島田華澄とその女性は同一人物だという可能性が高いですね」

「ああ。ただし寺本くんがそこにいるのか、そして無事なのか、それはまったく分からない」

長沼はため息混じりに繰り返した。

「無事ですよ、絶対」

隼人は力強く言ったが、内心は不安だった。たとえ無事であったとしても、この一ヶ月間何の連絡もないということは、何を意味するのか、それは容易に想像のつくことだった。

――それでもいい。お前がたとえ殺人犯になってたって構わない。頼む、生きていてくれ。

隼人は祈る思いで窓の外を見詰めていた。

「チョウさん、あの家じゃないですか？」

運転席から馳部が声を掛けた。隼人が後部座席から身を乗り出して前を見る。木々が生い茂った、古い屋敷だった。

「ここにいいのか、寺本。お前はここにいいのか？」

隼人は長沼たちの邪魔をしないように、すぐにでも飛び込みたい気持ちを必死で抑えた。

インターフォンを押すと、白いフリルのついたエプロンの女が出てきた。長沼と馳部を見て、怪訝そうに聞く。

「どなた？」

「警察の者ですが……」

長沼が話し出すと、女は2人の後ろにいる隼人を見て声を上げた。

「あら、あなた。水森隼人さんじゃありません？」

長沼たちは驚いて隼人を振り返った。それ以上に驚いたのは隼人本人だ。そんな隼人に、女は微笑みながら言った。

「努さんのお友達ですよね？」

「お前は……。お前が島田華澄なのか？」

思わず乱暴な言い方をする隼人に気を悪くするでもなく、女は答えた。

「はい。努さんからお聞きでした？ 初めまして、島田華澄です」

島田華澄は頬を赤らめながら、頭を下げた。

「しかし……」

横から長沼が口を挟んだ。

「ここに住んでいるのは『牧野華澄』さんだと伺ったんですが」

「ああ、牧野というのは私の両親の名字です。両親は私のことをちっとも可愛がってはくれなかった。いつも邪魔者扱いでした。だから私は、両親が活着ている時も死んでからも、よその子だと思って生きてきたんです」

憎しみと悲しみの入り混じったような表情で説明すると、島田華澄は3人を中へ招き入れた。

「どうぞ、上がってください。今、努さんと食事をしてたところなんです。皆さんの分もすぐに用意しますから」

3人は何がなんだか分からないまま、上がりこんだ。

「どういうことなんでしょう？ まさか寺本が、あの女と普通に暮らしてると言うんですか？」

「分からん」

廊下を歩きながら隼人と長沼がヒソヒソと話していると、馳部が長沼の袖を引っ張りながら言った。

「チョウさん、何か変な匂いしませんか？」

そう言われれば、確かに奇妙な匂いがしている。先に立つ島田華澄に声を掛けようとした時、島田華澄が振り向いて言った。

「こちらです」

島田華澄が部屋のドアを開けた。

「うわっ。何だ、この匂いは」

馳部が声を上げる。長沼も思わず鼻を覆った。料理の匂いに混じって漂ってきたのは、明らかに腐敗臭だった。

――こんなところで普通に食事なんてできるわけがない！

隼人は部屋に飛び込んだ。

「寺本！」

家の周りは警察関係者と報道関係者と野次馬たちでごった返していた。隼人は、怒号が飛び交う中、ただ呆然と立ち尽くしていた。

努は既に死んでいた。ダイニングチェアに座ったままの姿勢だった。

「どうしてだ！ どうして……」

涙まじりに叫ぶ隼人に、島田華澄は平然と言った。

「2人で幸せに暮らそうと思ってたのに、努さんは私を受け入れてはくれなかった。私の作った料理すら食べようとしなかったの。空腹に耐えながら、なんとかロープをほどかせようとしていたわ。でも私はほどかなかった。そのうち、力づくでほどこうと暴れだしたわ。暴れたってほどけないのにね」

島田華澄はくすっと笑って続けた。

「それであんまりにもうるさいから、注射をしたの」

「注射？」

島田華澄に向けて拳銃を構えている長沼が聞いた。

「私、昔は看護婦だったんです。だから筋肉弛緩剤を打って、少しおとなしくしてもらおうと思って。でも分量間違えちゃったみたい。やっぱりダメね、現役退くと」

島田華澄は肩をすくめて笑った。

「そのうち目を覚ますだろうと思って毎日食事の用意をしてるんだけど、まだ目を覚まさないの。いつ目を覚ますのかしら」

腐りだしている努を見ながら、小首をかしげて島田華澄は呟いた。

島田華澄が乗ったパトカーが、サイレンを響き渡らせながら走り去っていく。シートで覆われて何も見えなくなった殺人現場に飽きたのか、野次馬たちも徐々に減っていった。

――たったひとつの親切が、こんな事件を引き起こすなんて……。

隼人はやりきれない思いだった。

何とか涙をこぼさないように、隼人は天を仰いだ。

青く澄んだ空には、たくさんの桜の花びらが舞っていた。まるで、若くして命を奪われた努と穂波を現しているようで、隼人はこらえきれずに大声を上げた。



2人が結婚するはずだった六月になると、双方の両親の意向で、努と穂波は同じ墓に入れられた。墓の前には親族だけでなく結婚式に招待されていた友人たちが集まった。喪服ではなくドレスアップした人々に見守られ、2人の遺骨と結婚指輪が墓の中に入れられた。

「幸せになれよ」

隼人は手を合わせて呟いた。

(完 結)

## 結婚

<http://p.booklog.jp/book/42797>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42797>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42797>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.